

8) 陰茎癌に対する電子線照射の治療成績

坂田安之輔・小松原秀一
北村 康男・渡辺 学 (県立がんセンター)
阿部 禮男 (新潟病院泌尿器科)
斉藤 真理 (同 放射線科)

表在性陰茎癌 (T1) では放射線治療の意義が確立し、陰茎を温存する治療方針が普及したが、我々は腫瘍の大きさ、浸潤程度が高度でなければ T2 (海綿体浸潤) にも電子線照射に BLM を併用した治療を行ってきた。30 年間に治療した全症例は39例となるが電子線照射の長期成績を手術群と対比して報告する。Stage 1 (TINOMO) 7 例中、照射は 5 例で行われ、照射後の癌再発は 1 例 (20%) であった。その 5 年、10 年生存率はそれぞれ 80.0%、53.6% であった。一方、手術は 2 例で 1 例が再発し、5 及び 10 生率は 50% であった。Stage 2 (T2, No-1) の 18 例中、12 例が照射され、照射後の癌残存、癌再発は 6 例 (50%) で、その時点で手術され、5、10 生率は 100% 及び 80.8% であった。手術の 6 症例では癌再発はなく、5 および 10 生率は 83.3% であった。照射群の 50% が salvage surgery を必要としたが、癌再発は数年から 10 年以上経過後に起り、綿密な経過観察により手術に匹敵する予後成績と長期間の陰茎温存期間が得られる。

9) 造血幹細胞採取ならびに簡易凍結保存法について

西山 勉・照沼 正博 (厚生連長岡中央
総合病院泌尿器科)
岸 賢治 (新潟大学無菌治療
部)

一般病院でも比較的簡便に造血幹細胞採取、ならびに簡易凍結保存法を行うことの出来るシステムを確立し、現在までに計 22 回の末梢血幹細胞採取と 2 回の骨髓採取を行った。また精巢腫瘍の 1 例と脳腫瘍の 1 例でこのシステムにより保存された造血幹細胞を用いた造血幹細胞移植を併用した高用量化学療法を行い、良好な結果を得た。このシステムを用いる事により、治療早期より計画的に末梢血幹細胞採取ならびに骨髓採取を行えば高用量化学療法に使用するに十分量の造血幹細胞を採取できる。原疾患を治療しながら、造血幹細胞が採取でき、その後の高用量化学療法をスムーズに行うことが出来る。今後、今回確立したシステムを有効に活用していきたい。

10) 早期食道癌術後再建胃管に発症した早期胃癌の 1 治験例

綿貫 啓・谷口棟一郎
家里 裕・井上 智博
大木 聡・長岡 弘 (小千谷総合病院)
横森 忠紘 (外科)
五十嵐俊彦 (同 病理)

食道癌切除後の再建臓器として胃管を用いた場合、胃癌の発症には常に留意する必要がある。今回、我々は、術後の定期的な経過観察によって、再建胃管の早期癌を発見し切除し得た 1 例を経験したので報告する。

〔症例〕64 才、男性、平成 2 年 10 月 4 日、食道癌 (Em-Ei) の診断で、食道亜全摘・郭清・経胸骨後頸部食道胃管吻合術を施行した。組織検査では、sq, sm, n (-) であった。平成 4 年 9 月 8 日、上部消化管内視鏡検査で下部胃管にびらんを認め、組織検査で Group V と診断された。自覚症状なく、入院時現症でも異常は認められなかった。また、画像診断上も食道癌の再発を思わせる所見はなかった。

〔手術及び経過〕平成 4 年 10 月 13 日、胃管全摘・空腸置換術を施行した。胃管幽門前庭部に II b 病変がみられ、組織検査で、tub 1, m, n (-) と診断された。術後に軽度の嘔声のみみられたものの、経過は良好であった。

11) 当院における非触知乳癌症例について

姉崎 静記・小山 真
北條 俊也・坂下 滉 (新潟県立新発田
病院外科)
中村 茂樹・鳥影 尚弘

臨床上腺腫瘍が触れない症例から乳癌が発見されることがあり、このような症例はどのような臨床像、検査上の特徴を有するのかについて当院外科での原発乳癌症例 469 例のうちから検討を行った。

乳房に腫瘤を触れない乳癌は 17 例あり、このうち 7 例は T₀ 症例であり、7 例のうち 6 例は潜在性乳癌であった。

乳頭異常分泌のみを主訴とする症例は 5 例であったが、分泌物細胞診で確診が得られた症例は 1 例のみであり、全例が選択的乳管腺葉切除術を行なった後の病理組織検査で非浸潤性乳管癌と判明した。

近年乳頭分泌液中の CEA 濃度を測定して腫瘤を触れない乳癌を質的に診断する検査器具が発売になったので、検査の測定値と検査症例の乳管乳腺の病理組織像を合わせて検討して、この検査の有効性を検討し、さらに

この検査が極めて有効であった症例についても報告する。

12) 進行胃癌における術中ダグラス窩洗浄細胞診の臨床的意義と必要性

南村 哲司・小林 浩司
梨本 篤・佐々木寿英
加藤 清・佐野 宗明
筒井 光広・土屋 嘉昭 (県立がんセンター)
牧野 春彦 (新潟病院外科)

〔目的〕洗浄細胞診の臨床的意義と、術中 CDDP の腹腔内投与の臨床効果について検討した。

〔対象〕1991年末までの4年間に手術を施行したS(+)の進行胃癌385例中、洗浄細胞診施行例は254例である。class IV V を陽性とした。

〔結果〕①洗浄細胞診の陽性率は23.2% (59例)で、全てS2 (27/156), S3 (32/76)の症例であった。②洗浄細胞診のP診断に対する accuracy 83.9%, specificity 92.3%, sensitivity 62.5%で、陽性率はPO 7.7%, P1 48.4%, P2 64.0%, P3 87.5%であった。③POで細胞診陽性の13例では、9例に腹膜再発を確認し50%生存期間は24ヶ月で陰性例136例の42ヶ月と比べ有意に短かった(P=0.026)。④P(+)または細胞診陽性例の50%生存期間は、有意差はないが術中CDDPにより未分化型で延長した。

〔結論〕1. S2以上の進行胃癌に対してはP因子の肉眼診断に加えて、洗浄細胞診を施行する意義が認められた。2. P(-)症例でも細胞診陽性例はP(+)として扱うべきである。

II. 特別講演

みなし児ウイルスから

パピローマウイルス 5b型まで

岡山大学医学部附属分子細胞
医学研究施設長教授
矢部 芳郎 先生

第14回新潟てんかん懇話会

日 時 平成4年11月28日(土)
午後2時30分～6時30分

会 場 新潟大学医学部有壬記念館
2F

I. 一般演題

1) てんかんの Magnetic Resonance Spectroscopy

渡辺 浩之・桑原 武夫 (新潟大学脳研究所)
辻 省次 (神経内科)
大久保真樹・伊藤 猛
酒井 邦夫 (同 放射線科)

目的:近年、臨床用装置でも生体の特定領域から生化学情報を無侵襲的に得ることができるMagnetic Resonance Spectroscopy (MRS)が可能となった。今回我々は部分てんかんの症例で¹H-MRSを検討したので報告する。

症例:16才の男性。6才時右手の震えがあり、てんかんと診断された。7才時に全身痙攣発作が出現。8才時、軽い右麻痺と頭部CTで左脳半球の萎縮を認めたが、頸動脈造影・脳シンチ・アミノ酸は正常。その後内服治療でも、時々右下肢に始まり全般化する痙攣発作を認めた。

'92年の発作間欠期の脳波で、左前頭葉優位に2Hz程度のspike & waveを認め、CTでは前頭葉優位に左大脳半球の萎縮を認めた。MRI・T₂強調画像にて左側脳室の前・後方と半卵円中心に軽度の高信号域を認めた。¹²³I-IMP-SPECTでは、左大脳半球全体に血流の低下を認めた。

方法:MR装置はSiemens 1.5Tで、head coilを用い、STEAM法にて関心領域(VOI)の局在化を行った。TEは270 msec、加算は256回で、両側前頭頂葉に3.5 cm立方のVOIを設定した。

結果:健側に比べ患側では、NAA/クレアチン比は約半分に減少し、乳酸・脂肪のpeakが認められた。

考察:NAAはNeuronに特異的に含まれるためその障害が示唆され、これは過去の報告と一致する。乳酸に関して過去の報告で一定の見解はない。部分てんかん症例のPETおよびSPECTでは発作間欠期では脳代謝・血流の低下が、発作中は焦点部の脳血流、糖代謝率の亢進が報告されている。我々の¹³C-MRSを用いた動物実験でも発作中の糖代謝亢進と嫌気性解糖による乳酸の産生が認められている。本例においてSPECTでは血流低下を認めている。本例においてSPECTでは血流